京都教育大学ＦＤニュース

No.91
2020 年 3 月 18 日
京都教育大学ＦＤ委員会

****

本学におけるＦＤ活動の一環として実施しております「授業アンケート」へのご理解とご協力を感謝申し上げます。

今回のＦＤニュースでは、「2019 年度第 2 回ＦＤ研修会」、「2019 年度大学院教育学研究科授業アンケート調査結果」、「2019 年度 後期授業アンケート活用状況調査及び中間アンケート実施結果調査結果」について報告いたします。

****

１．2019 年度第 2 回ＦＤ研修会

「教職大学院の概要」　講師：連合教職実践研究科　浅井 和行 研究科長

2019 年 12 月 18 日に、連合教職実践研究科長の浅井和行先生より、「教職大学院の概要について」というテーマでご講演いただきました。今回のご講演は、教職大学院への移行を控え、全教員が教職大学院について理解を深めることを目的として企画させていただいたものです。筆者自身、連合教職実践研究科の授業を担当させていただいていますが、その理念やカリキュラムの全体像などを十分に理解しているわけではありませんでした。連合教職大学院の準備室時代の議論から、連合のシステムの特色、カリキュラムの特徴をわかりやすくご紹介いただき、設置された経緯を知らなかった筆者も、教職大学院の設置の背景に先生方のどのような思いや理念があったか、その一端を知ることができました。教職大学院が乱立し、定員充足が厳しい状況のなか、新たに設置される教職大学院がどのような理念と特色あるカリキュラムを持って魅力ある大学院になれるかが問われているのだということを実感するお話でした。

参加された先生方からも、「現在の連合教職大学院がどのようなことをやっているのか少しイメージがつきました。教育学研究科との違いなども、明確になりました」「連合教職大学院について、まとまった話を聞く機会を初めて持つことができました。理解をすすめることができました」「教職大学院に移行していくこの時期に連合教職実践研究科の実際を知ることはとても大きな収穫だったと思います。自大学にありながら知らないことが多すぎると再認識しました」など、この時期に現行の教職大学院について理解することができてよかったという感想を数多くいただきました。

また、「今後は教科専門の内容もカリキュラムに取り入れる必要がある。高校教員には教科内容について自ら研究していく力も必要だと思う」「今後、合流して一本化する際に、どのような内容を深めていく組織となるのか、そのために学部の教育でどのようなことをしておくべきかなどが整理されていくことを望みます」「本当に課題のある学校は院生の実習先として選ばれないように思います。このような学校を実習先として選べるようなシステムはできないものかと思います」など、今後取り組んでいくべき課題について、さまざまなご意見もいただきました。

２．2019 年度 大学院教育学研究科授業アンケート調査結果

１．量的分析

2019 年度の大学院教育学研究科の授業アンケートの結果について、報告をいたします。2019 年 12 月 23 日を締め切り日として、主任指導教員から院生にアンケート用紙を配布して頂きました。回答率は、学校教育専攻が 39.3%、障害児教育専攻が 42.9%、教科教育専攻が 41.1%でした。調査時期が 12 月であり、修士２回生は修論執筆のため、大学に来る機会が少なく、調査協力者の多数が修士１回生であると推測されます。

履修科目の分類では、どの専攻も「特論」または「特講」についての回答数が多いことが示されました。

取組の意欲については、どの区分においても「とても意欲的に取り組んだ」が最も多く、66～85%を占めていました。「特別演習」や「〇〇科教育実践特別演習」の科目が相対的に高く、他方、「学校教育実践総論」や「教科内容論」が低いことが分かります。前年（2018 年）度と比べると、意欲的取組が高まっていることが窺われます。

満足度を見ると、「とても満足した」が 20～82%と差異が見られました。不満度がやや高いのは、学校教育専攻の「特別演習」や「学校教育実践総論」です。全体を見ると、前年度と比べて、不満度は低下していました。

難易度を見ると、「とても難しかった」が 25%前後を占め、前年度より増加していました。他方、「やや易しかった」と「とても易しかった」を併せると、全体では 18%であり、前年度の 31%より低下しており、難易度が上がっていることが窺われました。ただし、他専攻の科目の受講では、基礎知識が不十分であり、難しく感じ、自専攻の科目の受講では、概ね易しく感じる傾向にあることを念頭に置く必要があります。

「体系的で良くまとまっていた」では、「とてもまとまっていた」と「ややまとまっていた」を併せると、87%を占めており、担当教員が受講生の理解や反応を受けとめた授業であるかについては、89%が肯定的でした。シラバスの参考度は、区分により差異はあるものの、78%が参考になったと回答していました。

「教員となるうえで（教員にとって）役立つか」については、区分により差異はあるものの、全体としては「とても役立つ」と「やや役立つ」とを併せると、84%を占めていました。

２．質的分析

次に、自由記述について紹介しましょう。ストレートマスターと現職教員で構成されている授業の受講感想としては、以下のような記述がありました（一部のみ掲載：文体は常体で統一）。

(1) 専任教員経験あり（現職）

・互いの良い視点から意見を共有することができるので、視野が広がりよかった。
・いろいろな立場の人の意見を聞くことができ、学びにつながった。
・現職教員が言い始めると「経験」の話しになってしまい、ストレートマスターの人が発言しにくくなる傾向がある。本来はお互いの意見を交流することが目的だが、現職教員の「すごい話」を語る／聞くに終始しがち。ディスカッションをする際には、両者が対等であること、現職が話しすぎないことの前提をみんなで共有すべきだと思った。

(2) 専任教員経験なし

・現場の経験が無いため、目の付け所や意見などとても参考になる。とても勉強になる環境だと感じている。
・現職の先生方から今までの経験に基づいた意見などをお聞きすることができ、とても勉強になった。ただ、グループワークやロールプレイなどの時、現職の先生方の中にストレートマスターが自分だけだと、こんな意見で良いのだろうかと発言を少しためらったり、申し訳なさを感じたりする場面もあったように思う。
・現場に立たれた経験をお聞きできることはとてもためになるので、交流の機会を授業の中に多く設けて欲しい。
・グループワークディスカッション等では、バランス良く構成されるように調整して欲しい。

次に、授業改善に関する意見や要望を記しましょう。

・学校現場、授業場面を想定した授業があまりにも少ない。心理学的な話が中心になるのはよいが、実践場

面を想定した話をしないことには教員は育たない。どのような教員を育てたいか？　全く見えない（現職教員）。
・授業が３限だったので５限以降にお願いしたい（現職教員）。
・授業の時間割を考慮して下さっているおかげで、働きながら通うことができる。授業内容も、学生のレベルや学びたいことに合わせて考え直して下さる先生も多くいる。とても丁寧で、今の自分よりも少し難しいことを学べている。持ち帰りの仕事がある中、授業の宿題も有り大変だが、大学院で学べる喜びを感じている（現職教員）。
・現職教員だが、学部が違う学科で履修していない内容（分野）があり、学習を進める上で、自力で勉強するには難しすぎる。学部の授業を受けようと思っても大学院の授業等の関係で受けることができない（現職教員）。

３．まとめ

2019 年度の大学院教育学研究科の授業アンケートの結果を概括してみましょう。

回答者数は前年度を上回っていますが、在籍院生数の過半数に到達しておらず、課題が見られます。修士２回生が参加しやすい時期に実施することが改善策ではないかと考えます。

院生の取組の意欲や満足度は、概ね高いことが窺われますが、科目区分により、差異が一部で見られます。

また、教員にとっては、自専攻の受講者と他専攻の受講者に既習知識の差があり、これに配慮した講義をすることの難しさを痛感します。

現職教員とストレートマスターが一緒に学ぶことの意義は、大いに認められていると感じました。「理論知」と「実践知」をいかに融合させるかが、問われています。現職教員にとっては、自分の実践に対して、大学院の学びで「意味づけ」を図り、ストレートマスターにとっては、学校現場の実践の豊かさと難しさを具体的に知ることができる点です。

学部の授業アンケートと比べると、回答者数が少なく、数量的変化だけに焦点を当てるよりも、質的な調査をより充実させることが求められます。ＦＤ委員会委員が、院生に対して面接調査をすることもその対応策と考えられます。

大学院生の受講ニーズの把握が大切であり、講義内容・授業内容の改善にも活かせることと思います。初回の授業時に、院生に授業ニーズを調査し、シラバスの見直しや教材・資料の追加などをすることも考えられます。

ところで、教職大学院では独自のＦＤ活動を行っており、大学院生との懇談も行っています。教職大学院への完全移行にむけて、ＦＤ委員会でも今後、教職大学院のＦＤ活動の紹介も行いたいと考えています。

３．2019 年度 後期授業アンケート活用状況調査及び中間アンケート実施結果調査

「授業中間アンケート」は、授業担当者が学生の実情や要望を把握し、授業改善の一助としていただくことを狙いとしております。アンケートの実施は期末に実施する「授業アンケート」と同じ６名以上の受講登録がある全授業にお願いしております。

『2019 年度後期授業アンケートの活用状況調査及び中間アンケート実施結果調査』

回答期間：2019 年 11 月 22 日から 2020 年 1 月 10 日（金）

回答枚数：62 枚（全体配布数 215　回収率 28.8%）　（参考：昨年同期 53 枚）

Ⅰ．授業アンケート（期末実施分）の活用状況について

問１．過去の授業アンケート結果を 2019 年度後期の教育学部の授業に反映させている。

「はい」→ 56　　「いいえ」→ 3　　「過去に未実施」→ 3　　「無回答」→ 0

問２．授業に反映させていない理由についてお聞かせください。

・今年度からの授業担当であるため　　・今年度着任　　・実施せず

問３．授業に反映された内容についてお聞かせください。（複数回答可）

回答区分	回答数	反映した数(56)に対する比率
時間外の学習時間を見直した	7	12.5 %
意欲的に取り組めるよう対応した	13	23.2 %
テーマ・領域を見直した	3	5.4 %
教職への意欲・動機が高まるよう対応した	11	19.6 %
難易度を見直した	20	35.7 %
体系的でまとまった授業を心掛けた	4	7.1 %
授業の説明をわかりやすくした	27	48.2 %
テキスト（配布資料など）のレベルを見直した	6	10.7 %
速度（進度）を見直した	15	26.8 %
受講生の理解や反応を受けとめるようにした	14	25.0 %
その他	7	12.5 %
【その他：回答内容】 ・板書の量と筆記のための時間配慮をした。 ・授業の目的・到達目標を改めて説明し、奮起を促した。 ・板書の量を増やした ・教材提示資料 ppt. を改善した ・パワーポイントを見やすい字体、大きさにした		

〈コメント〉前期と後期に同内容を指導する授業においては、後期に授業内容の変更が難しい事情がございます。そのことは集計にも表れており、『テーマの見直し』や『テキストの見直し』などは少なくなっております。一方、『授業の説明をわかりやすくした』の回答が大きな伸びを見せております。

『わかりやすい授業』は学生の満足度や興味につながる項目です。各種の授業アンケートにおける回答が、受講生のやる気を引き出すための魅力ある授業づくりを意識した取り組みのきっかけとなれば幸いです。

Ⅱ．２０１９年度後期教育学部　授業中間アンケートの実施結果調査について

問１．独自作成のものも含め授業中間アンケートを実施した。

「はい」→ 45　　「いいえ」→ 14　　「回答なし」→ 3

問２．授業中間アンケートをしなかった主な理由についてお聞かせください。

理由：「独自のアンケートを行なっている」

・毎回授業の感想・意見を書かせており、その中で授業に対する意見・要望も出てくるので、それでカバーしたため

・授業中のミニレポートで疑問点、感想、意見等を記述してもらっていた。これをアンケートととらえてよいのでしょうか？

・少人数の授業だから。回答者が特定される。ただし毎回ふりかえりレポートを書いてもらっている。

理由：「受講生の数」

・受講生が３名だったので　・学生の出席人数が四名前後で少なかったですから

・受講生数が少なかった（６名）　・１０人以下ですので

理由：「時間がない」

・時間がなかった。卒論アンケートに協力したりして余裕がなくなった
・実施時間を確保できなかった

理由：「その他」
・授業を分担して実施しており、中間アンケートを行う意味がないため
・教室外での授業が多い為

問３．使用した様式について、お聞かせください。（中間アンケート実施者のみ）

「ＦＤ委員会の様式」→ 41　　「独自の様式」→ 2　　「回答なし」→ 2

問４．中間アンケートを実施した結果について、お聞かせください。（中間アンケート実施者のみ）

「意義があった」→ 23　　「どちらかというと意義があった」→ 18
「どちらかというと意義がなかった」→ 1　　「意義がなかった」→ 1　　「回答なし」→ 2

問５．授業中間アンケートの結果について、受講生と話し合ったり、言及したりされましたか。
（中間アンケート実施者のみ）

「はい」→ 23　　「いいえ」→ 20　　「回答なし」→ 2

「はい」回答者の記述：話し合いはもたなかったが、口頭と簡単な板書で結果内容傾向を言及した。

問６．授業へ中間アンケート結果を反映された内容について、お聞かせください。（複数回答可）

回答区分	回答数	反映した数(56)に対する比率
時間外の学習時間を見直した	3	6.7 %
意欲的に取り組めるよう対応した	5	11.1 %
テーマ・領域を見直した	0	0.0 %
教職への意欲・動機が高まるよう対応した	1	2.2 %
難易度を見直した	10	22.2 %
体系的でまとまった授業を心掛けた	1	2.2 %
授業の説明をわかりやすくした	16	35.6 %
テキスト（配布資料など）のレベルを見直した	6	13.3 %
速度（進度）を見直した	16	35.6 %
受講生の理解や反応を受けとめるようにした	13	28.9 %
その他	3	6.7 %
【その他：回答内容】 ・受講生の疑問に答えた ・要望があったのでパワポの文言を配布資料にすべて反映させた ・板書の簡素化、速度を少しゆるめる、説明の工夫		

問７．ＦＤ委員会様式の「授業中間アンケート」の設問について、お聞かせください。

「改善の余地あり」→ 3　　「現状のままでよい」→ 42　　「回答なし」→ 17

【「改善の余地あり」回答者の自由記述】
・人数が少ないと、結局記名式のアンケートと同じになってしまう。
・出席回数（欠席数）を書かせてもよいかと思うが特定につながるか…。
・学生に授業改善内容を提案させることは、教育を受ける側の学生に誤解を与えたり、教員の主体的改善を損ないませんか。

【「現状のままでよい」回答者の自由記述】

・自由記述の欄の書き込みは少ないです。私は毎時間ショートレポートを課すので、筆跡を気にしている可能性もありますが…。

【「回答なし」回答者の自由記述】

・記名式にするのはいかがでしょう。

・アンケート「見本」は「とても難しい」とか「とても易しい」、「わかりやすい」のような表現なのですが、学生用のアンケートは「とても難しかった」、「とても易しかった」、「わかりやすかった」でした。「見本」のような表現の方がいいと思います。

ＦＤ委員会の実施する各アンケートにご協力いただき、ありがとうございます。

ＦＤ活動は「教員が授業内容・方法を改善し向上させるための組織的な取り組みの総称」と定義され、平成 11 年度から制度化されています(文部科学省 HP)。また、「教員の教育・研究指導能力の向上には、ＦＤの実施や成績評価基準等の明示等とともに、自らの教育研究活動についての評価を行うことによって、その実効性を担保し、更なる改善のための材料とすることが重要である」（平成 17 年 9 月 5 日　中教審）という文言が示す通り、ＦＤ活動は教員の義務と言っても過言ではない取り組みとなっております。

このようにＦＤを義務と見なすことは、ある意味正しいのですが、ＦＤ活動に対して、ある種の拒否感や抵抗感が生まれることも否定できないと思います。

ＦＤは、教員各自の取り組みを否定するものではなく、日々の教育活動をより楽しく、より効率的で円滑に行なっていくための知恵の共有を目指しています。本学では実に多様な分野の研究がなされており、それらが教員養成課程という一つ屋根の中に同居している状況です。このことは同じ研究内容を持つ教員が少なく、それぞれが独立している状態に近いと思われます。そのような環境下では知識の共有が難しくなります。だからこそ、ＦＤによる知識の共有が必要となります。

ＦＤ研修会やアンケート等を通して、皆様と知識を共有し、教育活動に少しでもお役に立てればと考えております。

皆様の積極的なＦＤ活動へのご参加と、ご協力をお願い申し上げます。

****

問い合わせなどがありましたら、下記の委員までお願いいたします。

ＦＤ委員会委員：太田（委員長）、小松崎（副委員長）、東村、藤岡、山口
（事務担当：河原田、山本、村田）